災害時母子支援の課題と山形県の災害時母子支援システムの検討

山形県母性衛生学会 会員
青木実枝，平石皆子，豊田茉莉，渡邊礼子，橋本里奈，
小松香，前田真由美，金田真弓，高橋桂子

1. 研究背景

東日本大震災による母子保健への影響[1)]や、大規模災害を経験した妊産婦の不安や担当保健師の対応困難等[2)]から、災害時の母子支援システムの早急な構築が求められている。山形県においては、災害時の母子支援に関するガイドライン作成は未着手であるため、平成28年度に、県内の保健所および市町村で母子保健を担当する保健師・助産師を対象として「山形県における災害時母子支援の現状の課題と災害時母子支援システム構築に向けた調査研究」を実施した[3)]。その結果、災害時の母子保健サービスについて「制度設計ができている」と回答した機関は1か所のみあり、災害時の支援に関する検討が急務であることが明らかになった。平成29年度は、災害支援の経験者を対象とした調査[4)]を行い、これまでの災害時母子支援の課題が明らかになるとともに、今後の支援システム構築に向けて示唆が得られた。

以上のことから、今年度は昨年度の調査を継続して行い、現状の課題を明らかにしたうえで、本県の災害時母子支援システムを検討したいと考えた。

2. 研究目的

本研究の目的は、災害時母子支援に関する現状の課題を明らかにし、山形県の災害時母子支援システムを検討することである。

3. 研究方法

1) 調査期間

平成31年3月

2) 調査対象者

山形県内で母子支援に携わっており、災害時の母子支援活動に関心を持っている者

3) 調査方法

以下に示す内容についてインタビューガイドを作成し、半構成的面接を行った。面接内容は、対象者の許可を得て録音した。

- 災害時支援活動の内容
  支援の時期・期間，支援時の役割，協働した他の支援者
- 支援活動の具体的な内容・方法
- 支援活動の課題

・　支援システムに求めること

4)　分析方法

録音内容から逐語録を作成し、災害時母子支援の経験と支援システムの課題に関する内容を抽出した。それらを同質性・異質性に基づきカテゴリー化した。その後、災害看護サイクル[5)]の各時期に分類した。

なお、平成29年度に行った調査のデータも合わせて、分析対象とした。

5)　倫理的配慮

調査対象者には、研究の趣旨、個人が特定されないこと、調査協力は自由意志であること、調査に協力をしなくても不利益はないこと、調査結果は公表することを文章で説明し、同意を得たうえで調査を行った。

なお、本研究は山形県立保健医療大学倫理員会の承認を受けて実施した（承認番号1801－26）。

4.　結果

1)　対象者の概要

対象者は2名で、対象者の概要を表1に示す。

対象者は2名とも看護職で、発災直後から母子支援活動に携わった経験を有していた。

表1　対象者の概要

	A	B
年齢	60歳代	40歳代
職業（経験年数）	看護職（38年）	看護職（17年）

2)　災害時母子支援に関する対象者の経験と支援システムの課題

面接内容をもとに、災害時母子支援に関する対象者の経験と支援システムの課題について抽出しカテゴリー化した。（以降、カテゴリー名を【　】で示す。）抽出されたカテゴリーを災害看護サイクルの各時期に分類したものを表2に示す。

表2　災害時母子支援に関する対象者の経験と支援システムの課題

時期	カテゴリー
全期間を通して	【資金の確保】【支援者の役割分担・連携】【支援物資の確保】【後方支援の確保】【支援の依頼元の責任の所在】【被災地の遠隔避難所の支援不足】【管轄外の居住者の公的補助申請】【被災者の把握】【母乳の有用性】
急性期 （発災～72時間）	【被災者情報伝達の不備】【避難所の確保】【避難所の環境の調整】【役割の明示】【被災者の把握】【支援物資の確保】【後方支援の確保】【資金の確保】【避難生活の工夫】【支援者の人員確保】【支援者の役割分担・連携】

亜急性期 （72 時間～2，3 週間）	【避難所の確保】【被災者が受診する医療機関の手配】【支援者の人材確保】
慢性期 （～数か月）	【介入方法・頻度の変更】【支援物資の確保】【被災地の遠隔避難所の支援不足】【支援者の人材確保】
復興期 （～数年）	【支援物資の確保】【資金の確保】【後方支援の確保】【支援の依頼元の責任の所在】【管轄外の居住者の公的補助申請】【支援者の人材確保】【被災者の交流の推進】
静穏期	【様々な状況に対応した災害マニュアルの整備】【災害訓練の実施】【支援物資の確保】【後方支援の確保】

(1)　全期間を通して

対象者は、支援の全期間を通して、【支援者の役割分担・連携】【支援物資】や【資金の確保】【被災者の把握】に苦慮し、災害時だからこそ連携が必要な機関や支援物資を提供してもらえる企業や機関について情報を求めていた。また、当初支援を依頼してきた依頼元に対して、【依頼元の責任の所在】が不明になり、自分たち支援者のバックアップとしての【後方支援の確保】が困難であったと述べていた。【被災地の遠隔避難所】であるために支援が不足していることも、その要因として述べていた。

母子支援特有のものとして、妊婦健康診査や乳幼児健診、予防接種など、母子保健ならではの公的支援について、居住地と異なる地域での避難生活であるために【管轄外の居住者の公的補助】が受けられず、その手続きについて市町村が互いに情報交換してくれることを求めていた。また、避難所生活では、【母乳の有用性】を再認識し、日ごろのケアを見直すこともあった。

(2)　急性期（発災～72 時間）

発災後、対象者は【避難所の確保】を検討したが、【被災者情報伝達の不備】があり、十分な準備ができないまま、被災者を順次受け入れることになった。避難所で支援者は、【役割の明示】のために職能団体が災害時用に作成・配布したゼッケンを用いていた。発災直後のこの時期は、まず【被災者の把握】を第一に考えたが、被災者からの申し出がなく困難な場面もあった。また、この時期は生活環境を整えるために、年少児がいる被災者のための【避難所の環境の調整】や、授乳物品や月経用品などの【支援物資】【資金の確保】に苦慮しており、【後方支援】を得たいと考えていた。そのような不自由を強いられている中で、使用済みペットボトルを回収して配布し、外陰部洗浄に用いるよう指導するなど、【避難生活の工夫】を取り入れていた。発災直後であるため、【支援者の人員確保】や【支援者の役割分担・連携】にも苦慮していた。

(3)　亜急性期（72 時間～2，3 週間）

発災から数日経過し、長期間の避難所生活が予測される時期になると、長期滞在が可能な

新たな【避難所の確保】や、妊婦や小児の被災者が近隣で受診するための【医療機関の手配】をする必要性が生じた。また、支援者のスケジュール調整をしてシフト制にするなど、この時期ならでは【人材確保】の調整を行っていた。

(4)　慢性期（～数か月）

さらに2～3週間が経過すると、避難所での生活パターンができ始め、【介入方法・頻度の変更】の必要性が生じた。長期の避難生活の中で季節の異なる衣服が必要になるなど、【支援物資の確保】も必要であった。その要因として【被災地の遠隔避難所の支援不足】も考えられた。また、新たな【支援者の人材確保】に苦慮することになった。

(5)　復興期（～数年）

避難生活が長期にわたり、支援の内容は【被災者の交流の推進】が中心になってきた。長期化に伴い、【支援物資】や【資金の確保】は依然困難であり、【支援の依頼元】からの連絡もなく、【後方支援の確保】は期待できなかった。【管轄外の居住者の公的補助】として、予防接種の問題も浮上してきた。【支援者の人材確保】としては、避難している人々の減少に伴い、支援者が徐々に減少するという課題が表出してきた。

(6)　静穏期

対象者は、災害時の母子支援を経験する中で、【様々な状況に対応した災害マニュアルの整備】の必要性を実感していた。特に【支援物資の確保】、そのための【後方支援の確保】に苦慮したため、備蓄や他機関との連携を静穏時から検討しておく必要性を述べていた。また、長期的に災害支援を継続していくうちに、専門職以外の市民の協力の必要性を感じ、市民の意識を変えるためには、日ごろからの【災害訓練の実施】が必要なのではと述べていた。

5.　考察

1)　災害時母子支援システムの構築に向けて

研究の結果、全期間を通して、他機関や企業との連携、支援物資や資金の確保などを必要としていた。災害時支援をする上で、物資や資金は必要不可欠であり、継続的に支援をする上でこれらが途絶えることは支援の中断・縮小を意味する。支援の継続のためには、公的機関や災害支援の基盤ができている機関と連携することが重要であり、そのためには静穏時からの連携も必要と考える。

また、対象者は発災時の被災者の情報不足を経験したり、受診可能な医療機関の情報や、予防接種や妊婦健診などの公的補助に関する情報を求めたりしていた。災害により情報伝達手段が途絶える状況も考えられるが、県などの公的機関が情報伝達の役割を担うことも重要と考える。

支援者の人材確保は各時期に抽出されたカテゴリーであるが、時間の経過によって新たな人材を必要としたり、専門職だけではなく一般市民の力を必要としたり、時期によって異なるニーズがあることが明らかになった。必要に応じて関連組織に支援者を要請するなど、人材を確保する上でも連携は重要であると考える。

今回、災害時支援の経験者を対象とした調査から、災害時母子支援の実情と課題、支援システムに求めることが明らかになった。この結果をもとに、山形県の地域性を考慮した上で、母子支援に着目した災害時支援システムを検討したいと考える。

2) 本研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は 2 名のみであり、データに偏りがある可能性も否めない。しかしながら、対象者は母子支援の経験が豊富で、災害支援の課題について様々な提案をしていた。したがって、今回得られたデータは、山形県の災害時母子支援システムを構築する上で重要な資源となりうると考える。

今後は、さらに対象者を増やして多角的に分析し、山形県の地域性を反映させた災害時母子支援システムを作成・構築していきたいと考える。

（謝辞：本研究にご協力いただいた対象者に感謝します。）
（本研究は山形県の助成を受けて行った。本研究に関連する利益相反事項はない。）

文献

1) 吉田穂波，加藤則子，横山徹爾：わが国の母子コホートにおける近年の状況，および母子保健研究から今後への展望．保健医療科学 63（1），32-38，2014.
2) 吉田穂波，林健太郎，太田寛，他：東日本大震災急性期の周産期アウトカムと母子支援プロジェクト．日本プライマリ・ケア連合学会誌 38，136-141，2015.
3) 青木実枝，平石皆子，他：山形県における災害時母子支援の現状の課題と災害時母子支援システム構築に向けた調査．山形県ホームページ https://www.pref.yamagata.jp/ou/kosodatesuishin/010002/boshihoken/pdf/shounibosei/28saigaiji.pdf
4) 青木実枝，平石皆子，他：山形県における災害時母子支援システム構築に関する課題とシステムに求められること．山形県ホームページ https://www.pref.yamagata.jp/ou/kosodatesuishin/010002/boshihoken/pdf/shounibosei/29saigai.pdf
5) 小原真理子：災害看護の基礎知識．日本赤十字社事業局看護部　編．系統看護学講座 災害看護学・国際看護学，51-63，2014.

資料１　災害看護サイクルに沿った対象者の経験と支援システムの課題

時期	対象者の経験と支援システムの課題（面接内容の一部）
全期間を通して	もしかしたらお店に行けば買えるっていう物がすごくたくさんあったんだろうなと思うんだけど、やっぱりそうするとお金も必要だったかなって思うんで（後略）。【資金の確保】 連絡先とか、協力してもらえる企業とか、そういうのもわかってたら、もっとね。【支援者の役割分担・連携】【支援物資の確保】【後方支援の確保】 具体的に、自分たちがどう動けばいいかっていう、その、市の災害対応マニュアルっていうのはあるんですけど、それって被災者受け入れマニュアルではないし。（中略）ちゃんと指揮命令体制があれば大丈夫なのかもしれないんですが。【支援者の役割分担・連携】 大規模災害とか、保健活動にかかわるほどの災害が起こるとすれば、ってなった時は、市町村だけじゃなくて、やっぱり県にある程度、指示ルートとか、なんか支援ルートとか、できてるのかもしれないんですけど、あったらうれしいなと思います。【支援者の役割分担・連携】 依頼元が、本来ならほんとはもっと聞いてほしかったし、途中でね、足りない物とかも、もしかしたら聞いてくれんのかなっていう思いもしてたんだけど、まったくでした。で、こっちから電話してもなかなか閉ざされていて、やっぱりこれって自分たちでやるしかないんだなって痛切にそれは思いました。【後方支援の確保】【支援の依頼元の責任の所在】 自分たちが被災した場合とかは、企業だったり、あとは提携結んでる他県の市とか、そういうところの応援はあるんですけど、避難者受け入れの時の支援企業っていうのはたぶんないと思うんですよね。【被災地の遠隔避難所の支援不足】【後方支援の確保】 市町村も県も、母子支援だとその予防接種から何から、乳児健診とかそれこそ妊婦健診とか、そういうものも全部、「ここだったらこういうシステムにしてますよ。」とか、県外だとそれがなかなかね、つながりは持てないかもしれないけど、でも後でそれを戻してもらったりっていうと、まず県に連絡すれば相手の県に連絡とってもらえるとか、そういう連絡システムみたいなのをとってもらえてるとすごくいいのかなって思いました。【管轄外の居住者の公的補助申請】 とにかく全年齢で、命を守るっていうことが最優先になるんだろうなと思うんですけど、でも、母子でも全然大丈夫な、健康な人たちもいると思いますし。（中略）実際、こちらでハイリスクとしてフォローして

	る人たちの所在確認はしないといけないのかなとは思いますけど。どこまでもっていうと難しいんですが、こういう平常時でもなんか危ういなっていう人たちがいるので。【被災者の把握】 何かあった場合って、母乳はとても、いつでもね、飲ませられるもんで。あと、熱あっても下痢しても吐いても母乳は飲ませられるものだから。母乳ってとても、これだけ大事なものなんだよっていうことで、(中略) 母乳は本当に子どものほうから「いらない。」って言うまで夜1回でもいいから母乳飲ませてね、ってお母さんたちには話してるし。【母乳の有用性】
急性期 (発災～72 時間)	どんな方がいらっしゃるかっていうのが、来てみるまではっきりわからなかったんですね、情報が。【被災者情報伝達の不備】 こっちに避難してくる人がいるので、○○ (支所) としてこの人たち受け入れをっていうようなことで、本庁のたぶん災害支援の担当部から庁舎の担当に来て、さらにちっちゃい子とか高齢者とかも避難してくるよっていうの、(中略) また聞きのまた聞きの、みたいな感じ。【被災者情報伝達の不備】 市直営の設備っていうのがあったっていうのは、(中略) 今となっては便利なところだったなと。(中略) 民間施設に借り上げとかでもなくすぐ使えたっていうことで。ただ、ちょっと合宿設備みたいなところだったので、より町中から離れていて。(中略) もっと町中に受け入れられる施設があればよかったなと思います。【避難所の確保】 赤ちゃん連れの人はやっぱり別にしてもらわないとおっぱい飲ませるときに困るっていうので、(中略) あとちっちゃい子いる人達をまとめてもらうことに、後から変更してもらったんですけど。【避難所の環境の調整】 助産師会のゼッケンを持ってたので、とりあえずこういったのをして○○ (避難所) にすぐ駆けつけたんです。【役割の明示】 もしかしたら妊娠してる方なんかも、「私、妊娠してるんですけど。」とかって言ってくれるかなと思ってゼッケンをしてったんですけど、やっぱり被災された方っていうのはなかなかそういう言葉を発してくれるっていうのがなくって。【被災者の把握】 もうほんとに着の身着のままっていう感じだから、哺乳瓶とかももらって、○○ (乳業会社) にも連絡して、もう、とりあえず、「ごめん。ミルクももし寄付してもらえるんだったら寄付してほしい。」とか (後略)。【支援物資の確保】 結構紙おむつとかね、大人のおむつとかは意外といっぱい集まったん

	ですけど、なくなるってあんまりなかったかな。ちょっと最初のうちはなくなったんですけど。逆にそういう月経時のナプキンとかが不足してたかなっていう感じで。【支援物資の確保】 あとは必要物品も、（中略）そういうものが至急でも手に入るような体制があれば。【支援物資の確保】【後方支援の確保】 ご本人たちが動ける方たちで、車で出て、最寄りのスーパー紹介して、そこで必要なもの購入するっていう形だったので、それがもし本当に今使えるお金も持っていないような状態で避難されてきたら、何も買えない、何もないっていう状態になっただろうなって思うんですよね。【資金の確保】 お風呂にも入れないので、（中略）ここ（ペットボトルのキャップ）に千枚通しで穴開けて、「トイレ行ったときにこれで、お水だとね、ちょっと冷たいかもしれないけど、お風呂に入れるようになるまで、少し流すときに使えるから。」って言って（後略）。【避難生活の工夫】 いつどんな場面で被災するかもわかんないので、そういうときに、私たち職員がいったい何人動けるのかっていう。こんなにたくさんいるけど、それぞれやっぱり家庭もあるし、通勤距離も結構離れてる人たちもいるし、支援に当たれるのがいったい何人残るのかっていうのが、もうどんなにシミュレーションしてもわかんないので。【支援者の人員確保】 いざ自分のところってなった時に、〇〇被災したときに受援体制ってとれるのかな、と思って。いろんなとこから来てくれるってなったところで、その人たちに「これお願いする。」みたいなのをできるのかなっていうのも。【支援者の役割分担・連携】
亜急性期 （72 時間～2, 3 週間）	（発災一週間後）市営住宅で、空いたばかりのところがあって、次の入居が決まっていなかったので、急遽そこに入っていただいたり。【避難所の確保】 （発災一週間後）あともう一組の方に関しては、今はもう建て替えになって新しくなってるんですけど、〇〇病院のドクターの公舎があったんですね。一軒家で何戸かあって、そこが古くてドクターたち誰も住まなかったんですけど、そこも空いてたのでご家族、ご家族連れには、使っていただくの何とかちょうどいいかなっていうことで、その一時避難所から準備が整い次第移っていただいたというような形でした。【避難所の確保】 妊婦さんも把握できた時点で、何週のだいたい何日で、この辺だとどこら辺にかかりたいかって、この辺だと〇〇病院とか△△病院とかって、

	病院の特色なんかもお話しして、病院も選んでもらったんです。【被災者が受診する医療機関の手配】 あったらいいなとしたら、（中略）受け入れ可能な産院みたいなのが、県の主導で「ここ可能ですよ。」とか「何人可能ですよ。」みたいなのが、あと市町にお知らせいただけるものがあれば、避難してきた方にすぐ受け入れ先をご紹介するとか、具合悪くなったってなった時にすぐ対応してもらえるとかっていうのがあれば安心かなとも思いますし。【被災者が受診する医療機関の手配】 とりあえず私たちもほんとに毎日、自分たちの仕事はもうゼロにして、毎日通いました。（中略）で、「来れる日はここで、来れない日はここだ。」とかって言って、みんなでスケジュールとりあえず出し合って。【支援者の人材確保】
慢性期 （～数か月）	最初はこう、なんか知られたくないというか、あんまり立ち入ってもらいたくないっていうような方のほうが多かったんですよ。（中略）ほんとにつらい人だと、もう途中から拒否されたみたいになって、「もういいです。」って言われたから、なんか私たちも「ああ、そうですか。」って、「ごめんなさいね。いろいろ聞いたりしたから。」って言って、「じゃ、もし何か必要な時は、いつも 2 階にいるので何かあったら連絡してくださいね。」とか言って。（中略）敢えてこっちから行かないようにっていうふうにちょっと仕切り直しをしてやっていたんですけど。【介入方法・頻度の変更】 お洋服とかも全然なくて、そういえば。ま、とりあえず持ってくるもの持ってきたけど、季節が変わればもう全然ないような状態だったし、被災地にそのまま残ってた方たちは支援物資があったと思うんですけど、避難されてる方たちに支援物資って届かないじゃないですか。【支援物資の確保】【被災地の遠隔避難所の支援不足】 なんせ人が足りなかったです。やっぱり勤務助産師はもう病院の中だけで精いっぱいで、（後略）。【支援者の人材確保】
復興期 （～数年）	私たちも、〇〇会としてもそういう蓄えとかは全然ないし、もう少人数、少数精鋭の人数だから、なかなか予算的なものもないので、自分たちで購入するっていうこともできないんで（後略）。【支援物資の確保】【資金の確保】 県のほうからも全然それで連絡も来なくって。【後方支援の確保】【支援の依頼元の責任の所在】 予防接種は、結局市町村っていうか、県が変わるとできないって。【管轄外の居住者の公的補助申請】

	ボランティアさんも一人減り二人減りで、○○（避難所）に行っても、最初は結構大勢ボランティアさん来てくれたんですけど、だんだん少なくなって。まあ、収容者も少なったからっていうのも、もちろんあるのかもしれないですけど。【支援者の人材確保】 廊下に張り紙して、体重とかもこういう時測りますとか、お茶飲みながらお話をしましょうとか、カフェの日とか決めて、そういうのも張り紙してたりしたんですけど、やっぱり閉ざされた方は絶対になかなか出てこれない。（中略）あと、何か行事の時になるべく子ども達がそういうこと、七夕とかそういうときに七夕の飾りつけをしたりとかっていうふうにしてずっと過ごしてはいたんですけれども、（後略）。【被災者の交流の推進】
静穏期	（災害の）マニュアル作って何回か勉強会をしたり、防災のほうの担当から来ていただいて、ちょっと勉強したりとかっていう機会も、何年に一回とかはあるんですけど、でもあくまでもやっぱりその、パターンが一つで、例えば休みの日だったらどうだとか、夜間だったらどうだとか、平日の日中だったらどうだとか、それぞれ動き方が違うと思うんですけど、そういうシミュレーションもまだできてなくて。【様々な状況に対応した災害マニュアルの整備】【災害訓練の実施】 1年に1回ぐらいはそういう、（中略）やっぱり市民の方だって、みんなね、ボランティアで協力してくれるわけなんで、やっぱりそういう市民の方にも「ちょっとこういうことならやれる。」っていうみたいなものは訓練でしてもらったほうがいいのかなと思うし。【災害訓練の実施】 それぞれの市町村で準備して更新、なんか使わない分また更新してとかっていうのを考えていくっていうのも難しいかもしれないんですけど、なんかそういう、最低限これだけはいつでも必要みたいなものが、おむつだったりミルクだったり哺乳瓶だったり、その消毒セットだったり、女性用の生理用品だったりとか、あと高齢者のおむつっていうのも必要かもしれないしとか、そういうものとかが欲しいってなった時に、協力体制が得られるような何かルートがあればいいのかなと思いますし。【支援物資の確保】【後方支援の確保】 毛布と水は各コミセン（コミュニティーセンター）にありますね。（中略）あ、医薬品もちょっとあるかな。食べ物とかそういうのないと思います。【支援物資の確保】